

3 認め合いをシステム化する

子ども同士が互いに認め合うことの大切さが認識されるようになると、教室では「いいところ発見」などの認め合い活動が行われるようになります。

安心感づくりの観点から見ると、それを単発の活動に終わらせず、システム化していくとさらに効果的です。認め合い活動でせっかく抱いたあたたかな気持ちも、時間とともに薄れてしまいます。手を変え品を変え、いろいろな場面でやっつけていくことも有効だろうと思いますが、一方で、スキルの蓄積や活動に対する満足感などを考えると、一つの方法に繰り返し継続的に取り組むことも大切な観点だろうと思います。

子ども同士の認め合いの活動をしていると、子どもが人を認めることやほめることがあまり上手ではないことに気づかされます。例えば、ほめられた相手が「これってほめられているのか？」と首をかしげたくなるようなほめ方をすることがあります。せっかくやるのであれば、ほめたことや認めたことがしっかりと相手に伝わるようなやり方を学ぶことで、効果を上げていきたいものです。

ここでは、子どもが喜び、継続的に取り組める方法を紹介します。

ハッピーレター

名刺大の紙に、子どもの名前をゴム印などで押して表記したカードを用意します。朝の会で次のように話します。カードはアトランダムに配ります。

みなさん、これから友達の名前の書いてあるカードを配ります。誰の名前が書いてあるかわかりません。先生が「いいよ」と言うまで見てはいけませんよ。（裏にして配る。）さあて、表にしてください。（反応を見る。）今日は、その名前の人を一日よく見て、その人のいいところを探して、そして、その紙に見つけたいところを書いてください。いいですか。

帰りの会に対して書かれたカードをみなさんに渡します。でもね、差出人の名前は書かないでね。そこは秘密です。

どんなことが書かれているかな？ 楽しみですね。

では、よく伝わるほめ方を教えます。せっかく、相手をほめるのなら、喜んでほしいでしょうか？ 「出来事言葉」と「気持ち言葉」で書きます。例えば、「音読をすごく頑張っていた」これは、出来事ですか？ 気持ちですか？（「出来事」との答え。）だよね。

それを見てどう思ったかも書きます。例えば、「立派だな」「すごいな」など。これが気持ち言葉です。これをさっきの「出来事言葉」に付け加えると、「音読を頑張っていて、すごいね」のよう



になります。

どうですか、どっちがうれしいですか。「音読を頑張っていたね」「音読を頑張っていて、すごいね」（後者がいいとの答えを確認する。）でしょう？ 人をほめるときは「出来事言葉」と「気持ち言葉」の両方で書くとうまく伝わりますよ。

はい、それでは書いたら給食までに先生のところに持ってきてね。

子どもたちが休憩時間にカードを持ってきます。その場で不適切な表現を直させます。差出人が書かれていないので、集めてしまうと誰が書いたかわからなくなってしまいますからです。ここでは、だいたい伝わるようであればよしとします。ただし、先ほどの「出来事言葉」だけだったり「気持ち言葉」だけだったりしたら、書き加えさせます。

また、例えば「イラストがヤバイ」などという表現は、子どもたちの間でだけならほめ言葉として通用しますが、別の表現を考えさせます。親が見る可能性があるからです。「誰が見ても、また、大人になって見てもうれしくなるような、みんなの気持ちがあなたかくなるような言葉で書いてね」と言います。

帰りの会で、「では、みんなから集めたカードを返します」と言うと、子どもはちよつと緊張した表情をします。カードを渡すと、食い入るように見る子どももいます。「うわーっ、これ、冗談でしょう？」と言いながらも、顔がにやにやしています。「どんな気分だった？」と聞くと、「うれしい」と言います。「先生、またやろう」という声もかかると、そこで、

みんながうれしくなったり、笑顔になったりするから、これを「ハッピーレター」と呼んでいきます。またやりたい人？（挙手全員、または多数を確認します。）そうですか、わかりました。では、しばらく毎週やりましょう！

と言うと、歓声がわくかもかもしれません。そうでなくても、多くの子どもが喜ぶでしょう。

ハッピーレターの日を決めて、毎週実施します。

また、ハッピーレターを書きっぱなしにせずに、ときどき、読み返すことができるように、「ハッピーレターアルバム」（次ページ参照）を印刷して配り、自分のことを書いてもらったカードをストックさせます。ときどき振り返って、あたたかい気持ちを持続させるためです。

せつかくもらったハッピーレターをなくしてしまつてはもつたいないですね。これから配る「ハッピーレターアルバム」に貼りましょう。

貼るたびにアルバムを回収して、こころを込めてほめてある文章を読み上げ、ほめます。よいほめ方を繰り返し知らせることで、子どものほめ方は確実に上手になっていきます。また、記述量も増えていきます。例えば「足が速くてすごいね」「手話が上手でやさしいね」などと表面的なことを書いてきた子どもたちが、だんだんと記述が詳しくより具体的になってきます。それだけクラスメートに



ハッピーレターアルバム

名前

--

--

--

--

ハッピーレターをもらって、読んで、思ったこと、感じたこと、学んだことを書こう。

関心を持ち、よく見るようになったということではないでしょうか。

- ・いつも音読のときに、人一倍がんばっているし、文と文のさかい目をちゃんと空けているので、
- 〇さんは作文や音読の才能があるんだね。
- ・いつもやさしくて、このクラスに笑顔をたくさんにしてくれているね。係の仕事をたくさん毎日やっているからすごいね。
- ・今日の朝、先生の話をよく聞いていてすごいなあと思ったよ。それに、このごろ特に勉強をがんばっていて、sonkeiしています。これからもよろしく。

ここに毎週、新しい「ハッピーレター」をもらうたびにカードを貼ります。四枚貼ったら、振り返りの時間を設けます。下の「思ったこと、感じたこと、学んだこと」の欄に振り返ったことを書きま

- ・自分で気づかないことも発見してくれてうれしかった。友達が見つけてくれたいいところをもっとのばしていきたいと思いました。「うね」と、みんな「ね」をつけてやさしく書いてくれたのでとっってもうれしかったです。

・だれかわからないけど、いつもいつもいてねいにイラストがあつたりしてかいてくれるんです。なので、私はこの四枚の人にすごく感謝しています。こんなにいいことを書いてくれると、私も